馬誌

調習部

九

武備兵法

和書門
類 一七二九五
號
函 一二〇
架 四
冊 六二

内閣文庫
和書
類 一七二九五
號
冊 六二
函 一五四
架 二一

内閣文庫
番號 和 17395
冊數 62 (10)
函號 154 455

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌卷之九目録

調習部

日本政府圖書

淺草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌巻之九

調習部

一 乗方問答の事

一 前をとる馬ハ何とゝも乗あるべくゝゝや

前をとる馬ハ第一爪の切中りまて走りゝゝゝ

第二ゝ乗中ゝゝゝと存しゝゝ口悪くかゝくゝ口まて

ゝゝハ取合前をとるゝゝのと存しゝゝ口をよくし

てゝゝく乗ゝゝもいゝゝゝも鎮めて足並と法

参申すべく候又一度爪を切りそこなひ爪をつみ掛ハさるゝ内ハ底足を参候ハ自然又前をゝる事もありと存候二度三度爪を切りて ハ其後ハ底足を参るとも云るものゝ様ハ爪をかくし鞍を少し跡へのけて置口の内ひしらひ足並をかゝつけ少持あて爪を切らすゝもゝ中まゝくと存候 ○右の不審晴申候

一 二つの内いつれよくゝや

二つの内いつれよくゝや

一 弦切の馬ハ口を重ぶよ重ゝハて ハ参申候ましくゝ候るの分ハ口よつれ申すものゝ様にて口悪き内ハ何とゝも切まるゝものゝ様存候

二つの鞍の内尤麁たるもよくゝ何とも云ふよりゝものゝ様存候但ゝ左へ切りへハ手綱を抱へ我身を右へ隠みへハ右ゝ重さゝよ依て一足つゝも右へより申ハ右ゝ弟より場中へ出申ハ是ゝ馬毎ゝきくゝ覚え申ハ ○不

審晴申し

鐙喰の馬ハ何とも乗あるべくや

一 鐙喰の馬ハ先いうじの妻ひと存しゐる。
けんあるゝ人の故ゝ之中うの癖也あると存
しいうしの人を乗るとうよ乗ゐ申さるべくハ
仕掛を結ひて尤と存しゐさて拵よ口付ひとき
鐙ゝてあるべくひをあふけあく跳あけゐ事
肝要と存しゐさて拵特の鞍を一入よきと
存しゐ ○不審晴申し

口心尽の乗合ハ何とも乗あるべくや

一 口心尽の三つハ皆人持をのりくるべくとな
しゐ乗りもあく行尤ゝたるるあても
口悪きあるあさ尽を行きるるをハ口を垂
しゐハ陸ハ高あくて行申すべくゐ是を合
を乗るとあしゐ又口も強足も強ゐべくとも人
過てあるべく尽を行きるるを仕うけを強して
馬いくみ出ゐ心を出きるやうよ人持て乗ると
人を乗と申さて又口人よくゐ沼先尽きのす

して足並揃さるを足並を專らに為事第
一筆は足並きゝ出し中うまん拵て為るを足
を為うとき出し熱てんも足も口つれしるもの
まゝ口を為すゝ乘出へハ悪きさんハ出ぬ
きゝ為し出筆一足を為出るゝとハ口を足より
も專らに為出へハ頓て足きゝ出すくゝ為
し出 ○右口ん足の不審晴中山

鐙ふゝ中うの大事大八文字。小八文字。
十文字。一文字。此写ハ何ゝ為よりて

踏ヲすくゝ出中

一 拵の大八文字ハ馬上袴見元中すゝのまて出ぬ
おし弱ゝ為ゝ拵ゝまて出中すハ餘り肝
き過出へハ筆一鞍下のん持為れさるものと
為し出ゝ上鞍弱くなり中出ゝ為し出但し
弱みの中うハ出へも初んゝ付ハ拵ふゝ
ゝるものまて出弱みをも構ハす肝き過出
中うハ大八文字ハ踏せ出るゝきゝ為し出小
八文字ハ右中出中うハ鞍下のん持一限ゝ為よ

くに殊に鞍強くにて四（に鞍によつれる鐙にていハ一八強くと赤しにて四八文字ハ俵初ところ
なるものあてにて物きハよて鳩むねくりにとき
地猫を伏せて舌先を開きたるうよし十文字
ハ輪を乗にとき又ハ切にるおとに鞍を踏り
にとき切り方を一文字おとみ切れさる方を弁
き十文字おるし中に輪を乗ときも四を開き
外を少し掛おりに踏に（ハ十文字に成に一文字
き只一つ乗さるものも在に是ハ乗出にる又

おき馬にても一文字おとみにときハ地胸おて
前足の云ちに尚りにハん為おり尚りに（ハ
足痛みにて猫こ足を投出に物に一足もおき
との徒計りおてにあきとき事ハ第一鞍強
おるとの事一文字に踏に（ハひさハ前輪に付に
是又鞍下のん持乗れすと在しに其上鐙強く
ふみに事成強くと在しに危角云さおて前
輪を挟みにてハおにさる所に口に連れに附なと
其口和に付に成強く少しおりとも近出

飛ぶ事ある時ハ鞍弱くて鞍より放れて落
るすることあり元来手身ありすがみて馬上悪
く見えぬ鐙の強みより徳多き事よりハ弱み
たる鐙ハ地道の時なりよきとあるハ又鞍を
表ハ時よし此外ハ強く踏こなるようなるとなるハ
○石審晴ハ

口を高くハ徳ハいと

口を通りハ徳ハ割こなる口を落して悪きとき
縮め通りてもよし又やく行内よりも差ハ

よりも右の口合の高よハ縮め通りてよくハ又銜
を用ひし強く當りハ左こなるとき馬なと
の地道の拍子悪こなるによし因ある馬よりも
口よりよくハ加中りの事ハ口心足並ようり
りて少しつ替りたる事ハ多くハ細かにハやさ
しすハ○右の石審晴ハ

上げ手緩をうちよく行内よりむらを出
し前足を高くして向へハ行すして
鞍うつさく強く飛あのりくして口を

上へ歩上げ〳〵まきるるハ何とも無いや

一 上げ手綱を歩るハ無出しを書くよ無るより
長もまつ初めハ内を無いこと第一の心持
たるへくと赤しゆとき歩上ゆて口をさんり
むらを出しゆと鞍ハ前へ掛りの綱を押下げ
てあし抱へて乗すへきと赤しゆまても乗
ぬと長えゆく鞍を綱の心ハ右の分まてむす
を出しゆとき先まつくらをりの心持と無
へし口ゆるるるの内ゆ歩上ゆ口ゆ強くて

蒐出ゆ口ゆのあるるハ五度ゆ三度ハ無まり
のを綱を長へし右の無無まてハ何とと上
手綱を心むるまても乗りゆうと赤しゆ
上げ手綱を歩遠のむくを出しゆとき鞍
を前へかり手綱を押下げゆて少し
抱へゆて乗させ下ハきゆ時も
し乗ふすハつくらをりの心を無へくと
ハいゆ

一 使らをりまて往乗りゆとハ鞍前へくり手

強をさけサー抱へとるをとりよゆへハむふつき
も乗りヲゆと覚えヲゆむらを五ーゆハんとをとる
とゝゝ其まゝつゝらをりの人形を乗りくハ向く
をのり飛たゝる石を乗因ゝ紹ゝ知られ右へ
引ゝと覚えッて又左へ引互ひ遠ひゝ引替ゝ
引れゆゝより向へ飛口を歩上ゆ事ゝ知ゝすゆ
取をまゝ乗りヲすと存しゆ ○不審晴ヲゆ

一 かゝ口馬をつゝらをとりハ何とゆ乗あるくゆ
かゝ口馬を前籠をとりハ強き方へハおさく弱
き方へハたゝさく乗ゝるゝよくゆ ○不審まて
もうれゝくゆ

何馬ゝても早通の因ゝ言るの競ひよく
今一足ゝく乗ゆ事ハ何とゆ乗ゆや

一 何馬にても今一足早くゝるの競ひよく乗ヲす
つゝ事ハ行因ゝ前りゆへと理よゝ言るハヲす
ゝ及ハす因ゝ言る馬ゝてもむゝを出ーゆ多勢
りヲものゝてゆ又前りゆゝて其まゝ乗ゆくハ
一足早くハ行ゝど馬の勢ひよゝく事ゝ知ゝさゆ

の時ハ手綱のにぎり第一の秘事と存じ白い
とハ行因よ天地の法ゆ張合い其内に強さ
方を少し下けいへハ一際早く言の義い結行
ものと覚中に何てもなくも右の心持入らすと
事あるまゝ〳〵くに ○不審晴中に

一 因と言る馬ゆ行因よ又一つ〳〵ゆまさる
格の心持我等乗覚えいるのあり普段
何とも乗覚えいや有り度い

一 因と言る馬ゆ我等乗覚えいる事ハ常の乗や
うにハ右中〳〵と言る馬ゆ上よ結りたる事を
廻しいる時言るよ曲り言をいゝませ中に鞍ハ少し
後を心得てせりいへハ馬せゝれて口を張無りの
しゝけいて行立中に先のしゝけ当を先口にな
綱を付て中り言るよのされいて中りいへハ馬利を
沿る口よ力出来一際ハ勢ひよく行と覚えい中に

一 右因と言る馬の内乗覚え一限とよくいる所
今少したらハさる事ゆ座にすみの口の下の
心持ハ一限よくいる廻しいてせりいへとせゝれいて

馬の方弱りかゝり競ひよく先知を先とする
猶々鞭を南又ハ鞭を緩くせりたるかゝ
ゝ者ハ口一の和をかりまてせるハまて也我等ハ
口一ゝくせりてせられて出申す和を先とする
術うとより形せり申ハ又貴様ハせり也ハ
馬口をのし也とさ緩を有て申り馬に利を
させ也ハ利を得てゝさとも考へ考へてハ
得を一度ものとハ其人持もよく也ハ先申りに
さゝ〳〵を緩を有て申り馬利を得させ也り〳〵

後ハ先る必らす口をくく押口をゝ〳〵
鞭を申さるゝとそよく行とさ口一也て
参五りよ必らす行也も口を反ら一嘴を
のり申くものゝり先をのり也とき手
綱を有て申りすゝ持ハよく也甚外ハ方の
馬よハあしく也○我等参考えとハ少一
遠ひ申也〳〵とも今少一ゆきたちやさすい
さい〳〵口をのさせ也〳〵ハ口をくく成との申
分何より警古よりゝ申るゝ也内をゝ言

八我等ゝ能上手ゝ覺之鍛練いとゝす山貴
拙八兼覺之程も四度ゝ也　○猶も四度ゝ
馬ゝ乘覺之ゝ山八口八別ても又八あとゝても
同様ゝ乘ゝ山乘ゝ立ゝ行四ゝ餘りせり過ゝ山八
程ゝ四度ゝ四度ゝ乘ゝ山ゝ我等ゝ身成
悪く言上ゝ乱れ中山ゝ出すゝ而ゝ乘ゝ山ゝ立ゝ行
立ゝ山ゝとゝさゝ八手綱の張合八中すゝ迄もなく山ゝ生る
の口ゝ乘ゝ山ゝ八ゝ強ゝ弱ゝ八強ゝ弱ゝ有ゝ乘ゝ
山ゝ大方八いかゝも和らゝ抱へもとり行ゝる

事肝要ゝ乘ゝ山ゝ鞍も中の鞍を少し跡ゝ引ゝ
て鞍ゝ手綱の位ゝ取ゝ上ゝ口ゝ開ゝ引ゝ
事ゝ乘ゝ山ゝ乘ゝ中ゝ迄ゝ山ゝ兎角是迄悪く乘ゝ山八
四度ゝ乘ゝ山ゝ一際遠ゝ山ゝ鞍八右ゝ中ゝ山ゝ如ゝ様
ゝ手綱の強合ゝ乘ゝ山ゝ乘ゝ中ゝ迄ゝ乘ゝ四度ゝ
ゝ言ゝ乘ゝ成ゝ成ゝ言ゝ乘ゝの氣ゝ引ゝ也ゝ悪ゝ
もある〳〵山様ゝ合ゝ乘ゝ八必ゝ出ゝ
ゝあるものゝ山ゝ乘ゝ少ゝ苦ゝ
すゝ山ゝ乘ゝ山ゝ右ゝ様ゝ成ゝ

なり候ひ一度乗申するなりとも後ハよく
なりまれなる外鞍を緩の張合又ハ行因を色
の心持ハ皆皆切のいやまていかゝ要く
中されさるハ又因をなるるるを第一のたゝみかてて
くひを乗なんえ中ハ多分のるゝ片口よりゆゝの
なりてたゝみかてくひとのゝかゝ口の馬の如くま
乗ハ口よりたかり搆ひて先へのたゝ口の
なるゝとを乗なんえ中ハ地道の内又ハ乗立たゝみ
の口よりてハ片口のたゝみかてくひとして乗さて

乗立ハまつ右の如く片口のたゝみかてくひ
と乗なんとさ馬たゝみて又一返しハたゝみ
とさ中ハ而て又たゝみのたゝみかてくひも
乗さいゝたゝみを按摩て違ハせて乗ハ
常よりハ一際あゝさと乗覺えを中ハ乗ハある
事うとも有せたゝハ上田吉之丞榛原
次郎左衛門我等父子ハ者も此傳ハこれなくハ
ゝ我等乗なんえとかやうと乗ハ一際
あゝ乗因たるる馬よハ此上あるまゝくとな

第一の手綱と仕い度安藝守度書物も
加中りは兎角くゆへくも悪きことのみてあるは
まーくと存しい所口ゆて因たるるのたみ
はそうひまたみを真中ゆ為るもはり又ハ右
へ接もあり左へ接もあり其乗ゆまるこまより
て昔より上手の記しさる書物ゆ有ら侍
文ハたみ中ゆ為りゆへ其たみを定まりゆい
又右へ引れハ右ゆ極左へ引れハ左ゆ極りゆい
我等ゆ為ん覚えゆハたみを定めたゆ為れハ

一隆ゆく行と覚えゆ但し是ハ早く行ゆい
とく計りのたみはかりのものひかり地道又ハ条
立ゆ角の口ゆてハたみあてゆひハ為ひのと
きの肝要と存しい此乗覚えハ如何ゆハんと
思召ゆ不審ゆ左ゆて有るへくゆ ○右ゆ条
覚えさりとてハ承り事ゆて左ゆ我等
たゆ為ハ此上の稽古鍛練ゆ成ゆ為もゆ為
るまーくゆ一入満足ゆ為れゆ為ゆ過すゆ

真中より強出しゆての徳ハ如何

一 中より引出すその使ハ切りんとなる時まる
場度くして左右より其さ行るかよ歩しよくい
方の脇より近出しハ切れいさあ係そ
ハ馬の腹方ハ引よ強く鞍を緩を
んと思へとも物後ハれハあなくいてまつ鞍
を緩より由るしいハてハ叶ハすさ中うよあ係
ハて鞍を綱を捨ハ利を得て生後さくよ
うけ中事ハぶさるものまていかゆうの行ハ必
らす底口まいんと為すハ其口を考よ歩し

いてハ切公歩り鞍くいんと為しハ ○不審
晴中ハ

千鳥足ハ行るをり計乱さ世ハ事何と
ハ系ハさるへくいや

一 千鳥足ハ行るをり計乱さ世中うハまつ口を
よく輕くして足歩を專ら系よく行叶よ
鞍をおし立透て刀持て鐙を張く踏ら放
れさるやうまふよ系せり立せり立系ハ
弦乱して行と鬼之中ハ第一ちくいてハ乱す

足行さるものと存しに
一右の条樣も強ゆへ（ともさりたるゝ）条一の
不足なる事あり右の分ハ何と成
いとも さいゝ むゝつさせ行ゝ中ゝ
ハあるまゝゝと存しに中ゝ条樣ゆへ
内ゝ障りもなく口のあいしらひをせて
てハ行さるゝものなれ ○右の条樣ハ口をあひ
しらひやすゝもの口さゝ軽く成ゆて口ゝ障る
ゝなくゆゝ行ゝそ強孔しゝて行ゝすゝ事

ある〳〵くゆゝ ○中分も開ゆへ（ともそれハ
亂す足ゝ生育ゝさる言ハ条樣の中ゝ
ゝくゆへ（ともゝ夫もむゝを悪く生ゝ時ハ口を
あいしらひやさゝるゝハ成まゝしゝ殊ゝ
足計りゝ行交ゝ足を生育ゝさる足ゝゆゝ口
をあひゝゝハすゝハ何とそ系ゝ（くゆゝ
足を交さゝせゝゝさハ馬をハせり立中ゆゝ
立ゆゝ必らす強生中すゝ（くゆゝ強生ゝ
附ハ其まゝ口をあひしらひゝすゝ条りと

足ぶみ何とそよくいハんや手綱らひいハ
をのし紙出し口を障りもなくあひしらひ
いハ口ハそり上られ鞍ハせられ此時ハクけ
孔すより外ハ何とそ足ハ出しかすくいやや
うの素掛とそも無拍子なる言の大拍子なる
ハ行さるものと存しの馬よりかの大拍子なる
馬をもおしも甲乙あるてハ是なくいハ拍子
よさなりとにハ行さるものとの中分てハ中
いめくに足ぶみよくいハ口障る石なくいハ輕く

成ハて行ハ思石ハとも前廉より行馬を
鞍を居変口ハ番ハりハて手綱らひいハ拍
子自ハるものとの中ハ時何とそ石審なくいや
たくよ行るを口を手綱らひいて拍子と
行自なれハ鞍練なるハ休足ある〳〵いハ○右の中
分て一入鞍練ハ手綱ハ公不足して却て
石審とうけ中ハ鞍初なる事にてあや
まりハ以上師弟問答

地道と素とくなりなる事

一強馬を乗つむるよろしき事

かけみゝして行馬よろしき事

おろしのるるよろしき事

地道の拍子悪きは前輪のよろしき事

かけのよろしきよろしき事

たくの足をとゝめてゝ考ふよろしき事

まはりくねる馬よろしき事

横うねをかけいしてゝよろしき事

立馬よろしき事

下り坂よろしき事

下口の馬と三拍子うけ出いよろしき事

上口の馬と三拍子よろしき事

一右ハ何とも前輪徳分と存しい

地道の拍子悪しきは前輪よろしといゝ

一右の馬は前輪よろしとやはて地道の拍子

悪き馬ハ鞍玉を取鞍荒くるるものそゝハ

中の輪ハ馬を押付るものあらさる拍子

おるゝゝふこさと存しいゝ前へ拵り鞍と

よく志くさ鞍玉を取るとき口を舎離らいして
引出し〳〵参ぶり〳〵ハ必ず地道の拍子ありとす
存しい○不審晴やい

一 張馬とハ前輪まて志つむるとハ如何
張るとハ前輪まて静るとハ右の地道の拍子
悪き馬とハ大ふく心持ハ同然まていいりどのる
出りハ此時ハ後の鞍を差て生るものと存しい
さてハ前輪をくつろけて中の鞍を参ぶり張
き馬ハ拵く出りまて〳〵くいるそのとき前〳〵撫

りいてを綱の心持を書ふ小参ぶりと何とそ
馬静りやすく〳〵此式いりど馬ハ前後を用
ゆるすおしも芝ふくいハ張るの先〳〵形た
りりい付ハ前輪を用ひいりハてハ引縄くい○不
審晴やい

かけみ〳〵たるよ前輪よきくとハいう〳〵

一 右の馬ハ前輪よきくとハ中の鞍後輪を
強孔させ〳〵ハ鞍玉をとられいて参られさるも
のと存しい其上地てハ形きて強出り計りよ

あるより前へかゝり口を釈らひ出て高山へハ
生付しる足と存しい ○不審晴中い

あろしの馬ゝ前輪よりさきのハめ何

一 右のつるゝ前輪を用ゆるすハ共も中と後の鞦
まてハ乱しを行馬よりハ行ゝ悪きと存しい
無てあろしの馬ハ鞍と前こつきいて行もの
なれハ鞍の上まて足たゝみの拍子をうけいて
高中い骨を拍子ゝ中の鞍後輪まてハ鞦ゝ重
み懸りいて一向高ゝれさるゝものと存しい 馬き

驚へよ空庭い荷と付しゝるゝとちと早く歩
ませてゝ発い付しゝる荷ゝ重くいゆへゝ鞍に
拍れいて鞍の上四ゝり中いゆへゝ殊の外苦ゝ
収中い苦理なれハ前輪ゝ懸りおしゝ透し
いて足なゝの拍子をうけ高ハ行行ともゝ苦
馬ゝくいゝんと存しい ○不審晴中い殊ゝ荷付
るの鞍の上ゆゝり中高ハ服錬一段おゝ
ろくい

弦いゝゝ前輪ゝきゝハゝ審ゝい弦い時

ハ成行と馬を引くに中り中さきの方にて当
強き事を者前輪を揺りゆして静まりゆと
仰られるすなれハ前輪ハ静ゆ鞍まてい
引かけのときハ前輪をくつろげてよくい
いんるまていを上いりて馬のとさく後輪
を変ゆくハ出ますなれハ後の鞍を変りと
杉く馬強出ゆてかけ引くいもん事まていい
ろ前輪よさくとハ不審よい

一

かけの鞍ゆ中の鞍後輪ハるよく出ゆん

ものゆゆ審仰られ理ハ一段ゆ之中に云ふふ
あろしの足さくも中の鞍まてハ拍子詰ゆ成
中さまていい殊ゆ強の附ハあろしの足よりも粗
鞍義くして鞍の上ゆかけふく動きに中を動
く足の拍子をハ中の鞍まてハ一向しゆ引中さま
いゆ立遠しゆて前輪ゆ揺り足の拍子と詰
ゆくハ一人引くゆ引と移しい中の鞍まてハ拍子詰
られさる事又後の居木ゆ折れゆて立遠しい
事成中さまていあ右ゆ中しる前付馬のよ

りゐる馬の心持よくて少しハ行くを悪きと存しゐ
前輪より掛りゐる鞍ハ悪て馬を静める鞍なて
いかに強のときハ悪くいたんるるれとも一足ふ
行時ハ馬の力生いりよも勇みいて余りゐ其
上を行くを余りよも勇ませて鞍鐙なてせりゆ
きを所より前輪静る鞍とハ中なりゐ先がまゐ色
なくいた中さめく危角足なるみの拍子を持ゐる
肝要なるゐ所より前輪より掛り拍子をさく考
より持ゐハ其外の後ハ一向構ひに成中さめるの

と存しゐ ○不審晴中ゐ

たくさりゐ行馬ハ前輪ゆきとハいりる
又ひりゐねい言ようきとハいりる又横ゐね
とうけい時ようきとハいりる此等の種形度
存しゐ

一 たくさ前輪ようさとゆきてハたくよ多馬ハ強き
馬を乗ゐ時なれハ第一静める鞍なゐ
又一つハ足なるみの拍子を持ゐる立上りゐりてハ
成中さきゐ所より前へ掛りゐる鞍ようさと存

しゐ因りなるの時ハ足の拍子を切りいん為
てうりに前輪まくと存しゐ

一 どうねい馬ハ鞍を捻りゐて ハ廻らさるもの
まてゐ〳〵ハ鞍をひねりゐ事一中の鞍と跡輪り
きりてハ何と捻り中さくゐ式前輪を掛り
ゐ〳〵ハ一入強きくと存しゐ

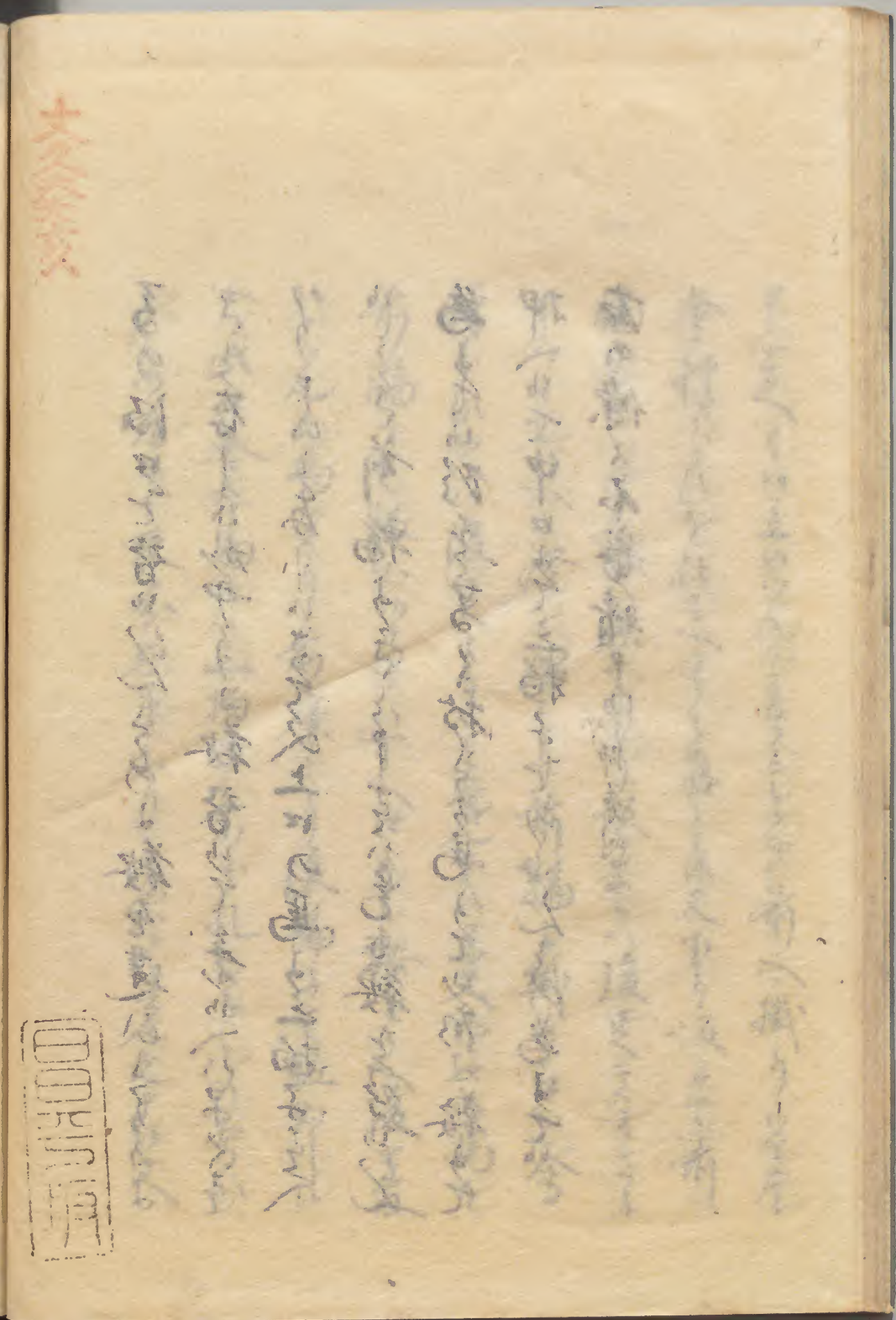
一 横畝をかけゐさ前輪ハ廻て前
足ハ強きくものまてゐ〳〵ハ かしりとも何とも
と軽く運ばせいん為ふ後とうろけいて前輪

掛りさるうよさと存しゐ ○右の三番続中ゐ
立馬ハ前輪ハ廻ハ中ハ廻ハ何又下り
坂まてうさとハいうゝ又下口の馬を三拍子
の強出〳〵ハ前脇まて強出さてハ又上口の
馬を三拍子さくゐ時ハ廻ハいう〳〵此等の
趣ハ下り度存しゐ

一 立馬ハ前脇を用ゐるハ中まてもかくゐ立馬ハ
前〳〵掛りゐハねハるり中さてゐ但し立馬ハ廻
ていうゝをさるものまてゐ言いうゝをさるふ事

中さゝくいこゝろにんそゝるゝゝゝ前へ撫りいてゝ
今鞍ゝいを付るゝくゝゝ者しゝゝ又下り坂ゝて前
輪ゝさゝと中ゝハ悪て下り坂ゝて八後足きうさゝる
ものゝて少ゝゝ踏ゝて前輪ゝ撫り口と今
鞍ゝいゝゝハ後足ゝゝさゝと乗ゝゝ是又下口の馬と
前輪ゝて延生りるものハすゝ口ゝて鞍とゝゝ後と変
いゝゝんゝの為なり前廉より後輪ゝて駈出ゝゝ
ハ武口合の馬ゝハ三拍子参ゝれさるゝの者ひ
ゝて少左ゝゝ取分悪ゝゝゝゝ乗ゝゝ乗ゝゝ又

るの法口を習ゝんゝゝめゝ鞍を違ひゝゝゝよ
きゝ存しゝかゝ中ゝゝゝ鞍習ゝて参ゝゝハ不くゝて
りゝゝゝゝゝゝゝゝ又上口の馬ゝゝ三拍子ゝゝゝ
いゝゝゝ前輪ゝゝゝゝハ乗も鞍ゝ習ゝんゝ
為ゝゝゝ形ゝゝるゝく拵ゝゝる馬ゝゝゝゝゝ鞍ゝて
押ゝゝて中口ゝて三拍子ゝゝゝゝ
右の條ゝ不審晴ゝゝゝ以上師弟問答



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan